
世界と神話

中岡健一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界と神話

【Nコード】

N3272W

【作者名】

中岡健一

【あらすじ】

始まりは父親が一人の少女に与えた『玩具』からだった。

少女の得たものは少女の世界をまるつきり変えてしまうほどのものであったが、それは少女の世界だけに留まることはなかった。

世界の革変に巻き込まれた少年たちは何を考え、どう生きるのか。

好（前書き）

今までに無い形の超能力ものの話とは何かと考えていたらこんなものが出来上がりました。正直意味不明な所や矛盾が生じていることもあるであろう素人の自己満足小説です。もしもそれに付き合ってくださいる方がいらっしやいましたらどうぞ先にお進みください。

好

全ての始まりは一人の少女だった。

広大な敷地内に存在する大きな屋敷。その中で一際大きな一部屋、そこが少女の世界。

少女の他に存在するのは時折やってきて少女の望む物を何でも与えてくれる父親と、父親が持ってきた無数の玩具。

それが……少女の全て。

少女の父親はそんな少女を喜ばせようと少女にあるものを与えた。

少女の望むまま、この小さな世界を作り変えられる力。少女はこの小さな少女だけの世界で神にも等しい存在となれた。

少女は喜んだ。少女の父親も喜んだ。

しかし……この小さな世界の中だけで成立していたことが、何かの拍子に外の世界と繋がってしまった……。

そして……世界は歪んだ……。

私は今、とても大きな建物の前にいます。

何だか物々しくて堅苦しくていかにも役所仕事をする所なんだろうなあと思わせる造りをしています。

生涯このようなところとはあまり関わりを持たないだろうと思っ
ていただけに少し気圧されてしまいました。

私が何故ここに来なければならなかったのかについてはいろいろ
とややこしくなるうえ私自身、はっきりと把握できていないので上
手く説明はできませんが直接の原因はつい先日、国の偉い人が自宅
へと訪れ私にここに行くよう伝えられたためです。

そして何故そんな人がうちに来たのかといえば両親が呼んだから
であり、何故両親がそんなことをしたのかといえば私が両親に『あ
ること』を伝えたからです。

ここまでは簡単に説明できます。しかしその『あること』が説明
するにはとても難しくまたややこしく、理解に苦しむものであるた
め私の貧相な語彙ではとても言い表すことができないのです。

それは私一人だけの秘密とするにはあまりにも大変なことでした。
ですので私はすぐさま両親に助けを求め、両親は国に助けを求めま
した。その結果私がここににいるというわけです。

しかし……場所だけを教えられ迎えも何もなかったので勝手に入
って良いものかどうか悩みます。

扉を開けようと手を伸ばしかけ触れるか触れないかのところで手
を戻す。そんなのがずっと続いています。恥ずかしながら小心者で
ある私はいきなりこんな状況に陥った場合に行動的にはなかなか
れません。

しかし、そんな周りから見れば挙動不審としかいえない行動を繰
り返していると不意に後ろから声をかけられました。

「ん？ 何やってんのかな。こんな所で」

私は突然声をかけられたことに同様して咄嗟に声が出ませんでした。

「あ……あの……す、すいませ……」

「ああ……なるほど。新しい子ね。入りづらいんだな、分かる分か
る。もうちょつと気軽に入れるような見た目にしとけて話だよな」

その人はあっさりと状況を把握すると扉を開け中に入り、私を手

招きました。

「ほら、入りなよ。いつまでもそこにいても状況は進展しないだろう？」

「す、すみません。ありがとうございます」

その人に招かれる形でついに私も中に入れました。……こんなことも人の手を借りなければ出来ない自分が嫌になります。

「さて……君もかなり緊張してるみたいだし、他の人に会わせるのはまた後にして少し話でもしようか」

改めてその親切な人を見ました。

私より少し年上位のお兄さんです。少し軽そうな所がありますがそこも今の私にはありがたいことです。あまり緊張しないですみませんから。それにとても良い人ようです。先ほどのこともそうですし、今も私に気を使って頂けています。

「あ……はい」

「良かった良かった。断られたらどうしようかと思ったよ。あれ？ ちょっと馴れ馴れしすぎたか？ とかひよつとしていきなり嫌われてる？ とかそれとも口説いてるみたいに思われたか？ とか悩むところだったよ」

「そ、そんなこと……嬉しかった……です」

「そいつは何よりだ。さて……どこにするかな。まあこの辺でいいか。好きな所座ってて」

お兄さんが決めたところは休憩所のような所でした。自動販売機やベンチなどが設置してあるわりと普通の休憩所です。ここでもまた気を使ってもらえたのか、あまり人目につかない場所です。

「何が良い？」

突然そう聞かれ一瞬なんのことか分かりませんでしたがお兄さんが自動販売機にお金を入れているのを見て、飲み物を奢ってくれようとしてるのだと分かりました。

「そ、そんな……いいですよ」

「いや、もうお金入れちゃったし、いいいいよ遠慮なくて。こ

れでも懐は結構暖かい方だからさ」

「それじゃあ……お茶を……」

「はいはいお茶ね」

お兄さんが自分の分と私の分の飲み物を持って来て私の前に座りました。

「いやゝでも少しホツとしたよ。君みたいな普通の子が来てくれて。今までの子はみんな少しばかり付き合いにコツがいるやつばかりだったからね」

「あの……お兄さんはここで働いてる人なんですか？」

多分違うんだろうなと思いながら私は聞きました。

「いや？ まあたまに手伝いはするからバイトも兼任してると言えば間違っちゃいないんだけど、本来は君と同じだよ」

「じゃ、じゃあ……お兄さんも……」

「うん。一応国に保護された身なのかな、自分でもあんま自覚していないけど。というかここに居るのは皆俺たちと一緒にだよ。たまに他の所からスーツ着たオッサン達来るけど、基本的に普段ここに居るのは皆俺たちのお仲間ってわけだ」

驚きでした。私と同じ様な境遇の人がいるだろうということくらいは予想できていてもよさそうなものですが、そんなことなど考えもしていなかっただけではなく、ここに居るのが皆そんな人だとは「それじゃあ、何人くらいいるんですか？」

「そうだなゝ俺も正確には把握してないんだけど先日三桁いったところだったかな」

「三桁……百人ですか？」

「おう、そうだよ。この人数が多いのか少ないのかは分かんないけどな」

少なくとも今日初めて同じ境遇の人に会った私にとっては十分多いと思います。

「さて……こんだけ長々と話した上でなんだけどそろそろ君の名前くらいは教えてくれないかな」

「あつ！ す、すみません。自己紹介もせずに……」

そうです。そういえばお互いまだまったく相手の素性を知りませんでした。お兄さんがずいぶんと親しげに話しを進めていくものですからすっかり初対面だということを忘れていました。

「あの、私は……藤崎好と申します……」

「はいはい藤崎さんね。俺は……亮。名前で呼んでくれ」

亮……さん。ごくごく普通の名前のはずですが私には何故かその人だけの特別な名前であるかのように感じました。……本当に何故なのかは分かりませんが。

「藤崎さんとりあえず歓迎するよ。君にとって嬉しいこととはとても言えないだろうけどさ……。とりあえずこれからしばらくは一緒にいるわけだからね。まあでも許可を取れば割と頻繁に家にも帰れるし友達にも会える。協力の謝礼もそこそこあるし悪いばっかじゃないさ」

「あの……協力って？」

「うん？ いや君もここがどういう所かは知ってるだろう？」

「その、それがまだよく……」

「ありやりや。まあ簡単に言や俺たちみたいなの保護と研究を目的とした機関ってかんじだよ」

「け、研究って？」

映画や漫画の見すぎと言われるかもしれないものの保護と研究は特別な人間の研究と言うとネガティブなイメージしか湧いてきません。

「ああ……いやいやそんな危なっかしいもんじゃないさ。ただまだ分かってないことが一杯だろ？ だからそれを少しでも明らかにするために協力してくれて要はそういうことなんだろうさ」

「じゃあもういろんなことが分かってるんですか？」

「いや……正直あんまりかな。何なら俺のほう詳しくくらいだよ。ただ俺の場合は裏づけの無い経験論だからね。全員に共通することとに限らないんだ」

亮さんの言い方は彼が私よりもずっと多くの経験をしてきたという風に聞こえました。つまり……亮さんは私とは違いここに来るまでに色々なことを経験してきたということなのでしょうか。

「聞きたい？ 俺の武勇伝」

「えっ？ あ、はい！」

「ハハハ。嬉しいこと言ってくれね。半分冗談だったんだけど……。まあでも藤崎さんも来たばっかで疲れてるだろうし今日の所はここまででいい」

「あ、あの私今日からここで生活するんですね？」

「うん、まあさっきも言ったとおり許可もらえば家にも帰っていいんだけど、しばらくはここにいた方が君のためにもなるんじゃない？ 混乱してるだろうし多少気持ちを整理させる時間もあるだろう？」

「あ……はい」

「じゃあ行こっか」

「え？ ど、どこにですか？」

「ここで一番偉い人。って言っても俺らと年もそう変わらないし、もちろん君や俺と同じような状況だけだね。多分あの人なら君の話も伝わってるだろうし」

考えてみれば先に挨拶するのは当然のことでした。それにしても……一番偉い人まで私と同じということはどういうことなのでしょう。国の管理下に置いておきたいということではなかったのでしょうか。

かなりの自由も許されているようです。言ってしまうはまだまだ得体の知れない所がある私達を全てまとめて、さらにそのトップにまで同じ様な人間を置くんなんて。

「藤崎さんは……さ。どう思う？ 俺たちのこと」

その一番偉い人の部屋まで行く途中、不意に亮さんが話しかけてきました。

「え、と質問の意味がよく……」

「ああ、ごめんごめん。ただ漫画とかアニメとかによくある超能力

とか魔法とかとはまるで違うんだよな。これ。君もここに来たってことは何かしら持つてるんだろうけど……どう思う？ そんな人間になれて……嬉しいか？」

「……私は、その……まだ自分のこともよく分かってませんし、今は嬉しいとかよりもただ混乱してることのほうが大きいです……」

「そうか……。まあそうかもな。悪い急にこんなこと聞いて」

それきり亮さんは部屋に着くまで何も話すことはありませんでした。

その後最上階で明らかに特別な部屋と思われる部屋の前まで来ると亮さんはドアをノックし、中に声をかけました。

「亮ですが……入りますよ」

多少不躰ともいえるその入り方にしかし中の人は何も言わずむしろ笑顔で迎えてくれました。

「やあ、君か。珍しいな。どうした？」

「多分あなたのところには話がいつてるでしょ？ 藤崎好さんですよ」

そう言っ て私を指しました。

「ああ……そういえばまた新しく誰か来ると聞いていたな。なるほどね君か。え、と名前は何だっ て？」

「藤崎好さんです」

「ああ、好ちゃんね。どうぞよろしく。私はここの管理を任されている者で茨木涯という」

亮さんはこの人が私たちと大して変わらない年頃と言っていたが、茨木さんは予想以上に若々しい人でした。

ただそれ以上に驚いたことがあります。茨木さんはその無骨と言える名前や凛々しい話し方とは裏腹にとてもきれいな女性であったのです。

「どうした？ 仮にも一組織のトップが自分と大して変わらない女であることに驚いたかい？」

そんな私の心を見透かすかのように茨木さんは言いました。

「い、いえ、そんな」

「クク、何気持ちは分かる。確かに私のような者が君たちをまとめているというのはつきり言っておかしい。常識的に考えれば、ね。しかし、今の世界が以前のようにな常識が通じる世界でもないということを知っているだろう」

「常識が……通じない世界？」

「まあ、一度に君に話しても混乱を招くだけだろう。その話はまた今度にするとして……。ようこそ、よく来た我らが同胞。歓迎するよ。気持ちとしては君の歓迎会でもしたい所だが、君も疲れているだろう。今日のところはもう休みたまえ。ここでの規則やら何やらはこの紙に書いてある。部屋に着いて一休みしたら目を通しておいとくれ。君の部屋もちゃんと載っている。一応君のところは三人部屋だが希望があれば個室にすることも出来る。まだまだ部屋は余っているからね」

茨木さんから何枚かの紙をホッチキスで止めたものを渡されそう伝えられました。

「最後に一つ。私は出来る限り君の安全は保証したいが、今の混乱した世の中ではそれも絶対ではない。それは心得ておいてくれ。では今後ともよろしく。亮君、好ちゃんを部屋に案内して」

「はいはい。じゃあ藤崎さん、行こうか」

「あ、はい。それじゃあ……失礼します」

「うん。何かあったらいつでもおいで」

手を振る茨木さんに頭を下げたあと、亮さんに続いて部屋を出て行きました。

「え」と君の部屋はどこだった？」

「あ、え」と。ここです」

紙に書いてあった私の部屋を見つけ亮さんに伝えたと亮さんは納得したようにうなづきました。

「なるほどね、この子らか……。まあいいんじゃないかな。もちろん全員女の子だし、君と年も近い。割といい子達だし」

「そう……なんですか」

その言葉を聞いて少しだけ安心しましたが、同時に少し不安でもありました。

「まずは慣れることだね。ここでは別にそこまで厳しい生活を強要されるってわけでもないから、そう時間はかからないと思うが」

「あの……亮さんは普段はどちらに？」

「うん？ ああ、俺は普段は……まあ、その辺ぶらついてるからもし会ったら声でもかけてくれると嬉しいな」

なんだかさりげなくはぐらかされたような気がします……。

何というかこの人には不思議な安心感があるのでこれから色々な相談相手になってほしかったのですが……。

「さて、着いた着いた。ここが君の部屋だよ。じゃあ俺はもういいかな？ それとも俺のほうから中の子達に何か言っておいたほうがいい？」

「あ、いえ大丈夫です。……ここまでありがたいました亮さん。今後ともどうぞよろしくお願いします」

「おお……どうした急にそんな畏まっちゃって。はは、もちろん分かってるさ。何なら君が望んでない時でも図々しく手を貸しちゃうよ」

「あ、いえその時は見守って貰っていた方が助かるかと……」

「冗談冗談。それじゃ、俺は行くよ。頑張って」

「はい」

亮さんに別れを告げた後、私は若干の不安と期待を胸に目の前の扉に手をかけました――。

好（後書き）

意見、感想、批判、不満などあればいただけると嬉しいです。

私の未熟さで不定期更新にならざるを得ないので次はいつになるかは分かりません。

他にも小説を投稿しているので出来ればそちらも見ていただけると嬉しいです。

涯（前書き）

局長の悩み。

基本的に亮少年を中心に話を考えています。

涯

ある時、『世界』に突如起きた異変。その原因も異変の全貌も未だはつきりとは分かっていない。しかし、例え混乱した状況であっても、いや混乱した状況であるからこそ政府としては何の手も打たないわけにはいかない。

そういつた経緯で急遽設立された我が機関であるが、残念ながらあまり状況は好転してはいない。

我々も異変の影響を受けた人間を集め、情報を集めるとともに異変自体に関しても調べてはいるのだが……分かったことなどほとんど無いも同然。

まず異変自体がどう説明すればいいものか困る代物である。異変が起きる前は確かに秩序だった『世界』であつたはずが……異変のあとの混沌具合といったらどうだ。時間も記憶も地理も曖昧となり、異変が何時起こったのかを正確に言える者すらない。ある者はつい昨日のように感じていたり、ある者にとっては生まれたときからこうじゃなかったかなどと感じていたりしている。少なくともある時に何かがあり、『世界』が変わってしまったことは確かだが……それ以上のことはさっぱりだ。

また、その異変の影響を受けたと思われる人間も相当数存在している。何を隠そう私もそういった人間の一人だ。もっとも異変の影響で記憶が曖昧なために自分が本当に異変が起きてからそうだったのか、それともその前からそうだったのか、迷うところではある。が、おそらくは異変が原因であるはずだ。そうだ、人間は本来こんな力など持ち得ない。……ふむ。

自室で改めて今までのことを見直していたわけだが、どれだけ考えた所で情報が圧倒的に足りない状況では答えなど出るはずもない。

それでも足りない脳みそを必死に回転させて考えていたところノックの音が聞こえた。ああ……おそろく彼だろう。ずいぶん早いお帰りだ。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきた人物は私の予想通り、機関の中でも私に次ぐ古参だ。

「やあ、どうだった。上手くいったかい？」

「残念ながら……。もう少し早く見つけられていたら助けられたかも知れなかったんですけどね」

「そうか……。まあ仕方が無い。君はよくやってくれているよ。他に何か変わったことは無かったかい、亮君？」

彼は――亮。この機関の設立間もない頃から私の下でよく働いてくれた、最大の功労者といっても過言ではあるまい。そしてもちろん彼も異変の影響を受けている。未だその全貌は見えないがそれは彼に限ったことではないだろう。

「ちよつと気になることはいくつかありますが……まあそれを言ったらどれもこれも気になることになっちゃうわけで……」

「どんな些細なことでもかまわない。全て教えてくれ。私としても情報は何よりも欲しているものだ」

「そうですか。それじゃあ――」

現在機関にはおよそ百名ほどの人間が在籍している。その全てが影響を受けた人間だ。この影響を受けた人間という呼び方はあまりに漠然としすぎていて私はあまり好きでは無い、が他に表現のしようもないのだからしょうがあるまい。

何しろ一口に異変の影響を受けたと言ってもその中身はそれこそ千差万別。超能力のような分かりやすい特徴があればいいが、私の知る限り未だに何が違うのか分からない者さえ機関の半数近くを占める。

目の前に立つ亮少年にしたってそうだ。何かがあることは間違いないはずなのだがそれが何かと聞かれると途端に答えに窮する。た

だ彼自身の言とこれまでの実績、私の観察眼などという不確かなものをかき集めてようやく理解できる形にできるというだけで。

ただそれだけでは説明しきれない部分も多い。だがそれが異変の影響なのかそれとも元々持っていた才能なのか、それが分からない。だからこそここまで研究に難航しているわけだが……。

彼が語る言葉を一字一句聞き漏らさぬよう紙に書き連ねていきながら更に私は考える。

我々が普通の人間と違っていているからといってそれが全て良い方向に働くはずもない。特に私などはこういった組織を纏めるのには向いているが、直接現地に赴き調査したりすることなどにはまるで向いていない。だからこそ他の者に任せておけないような事はほとんど亮君に丸投げしてしまっているわけだが……。

無論彼以外にも頼りになる人間は大勢いる。が、そのほとんどが安定性に欠けるという欠点がある。どれだけ優秀な能力があろうがこの混沌とした状況下では逆に扱いに困る。人間的に信頼できて尚且つこんな状況下でも平時と変わらぬ状態でいられる彼のような人間に自然と頼りがちになってしまうのだ。

それに彼は外見からは想像できないほどに思慮深く、賢い。少々ほめ過ぎな気がしなくてもないが一見あまり頼りにならなそうだからこそ、実はとても頼りになると分かった時に評価が高くなってしまうのは仕方の無いことだろう。

しかし……だからこそ……だからこそ心配に思うこともある。この少年の実力の高さを知っているだけに、いざ敵に回られたらという不安が拭えないのだ。そんな人間ではないと……？ そんな保証がどこにあるというのか。思えば私は彼について表面的なことしか知らない。彼が表面に写る通りの人間ではないことは既に十分過ぎるほど分かっているというのに。その人間性に関しても裏があると思うのが普通ではないか？

そういう目で見るとこれまで頼もしく感じていた少年が途端に恐ろしい敵のように見えてくる。

信じることももちろん大事だろうが……疑わなければ自分の身が危ないかもしれないこの状況ではそんな悠長なことは言っていない。

まあ……警戒はしておくにこしたことは無い、が、今の我々には彼の力はまだまだ必要だ。彼が力を貸してくれている限りはこちらも頼らせてもらおうとしよう。

「——まあ……こんな所ですかね。……局長？」

「ん？ ああ、ありがとう。大分参考になった。今後ともよろしく頼むよ」

「りょくかい。それじゃあ失礼しますよ」

「ああ、お疲れ様」

彼の報告から得るものは多かった。が、とりあえず当面の間は保留しておいていいだろう。先に済ませておくことが山ほどあるのだ。頭を悩ませる事態も多い。今日も徹夜のような。

賽（前書き）

前二話とは別の場所での話。

賽

私は冷静な人間だ。

どんなときでも取り乱すことはない。そもそも心を乱すということとそのものが未熟だということだ。常日頃から心を鍛えておけばいついかなるときでも冷静に目の前の物事に対処できる。

冷静さ、すなわち感情に惑わされない慎重かつ落ち着いた姿勢は生きていくうちで非常に優れた武器となりうる。

どれほど絶望的な状況であろうと最善の手を理想的にとることが出来れば打開は難しくない。

そう、今現在命を狙われているというこの状況においても……！

「おい。どこ行つたあ？ 逃げてても無駄だぞお」

私を追う男の声が聞こえる。奴が何故、私を狙うのか。その理由は不明だが今はそれを考えるときではない。考えるということはそれだけ隙が生まれるということだ。たとえ針の穴程の小さな隙であろうとも積み重なれば自らの命を奪うことにもなりかねない。だから……今考えることは必要なことだけ。いかにしてこの場を切り抜けるか……だ。

そのためには……！？

「何だ。こんな所にいたのか。全くよお。ほら動くなよ狙いが付け辛いだろ。使うの初めてなんだよ俺」

じゅ、銃！？

「あ、あああ……」

「動くな、つってんだろ」

ガシッ

「う、うわあああああああああああつ」

バッ

「おい。逃げんなよお」

……なるほど。銃を撃つのが始めてだというのは本当らしい。多少距離はあるとはいえ奴とほぼ直線状に並んだ私に向かって撃つてこないということは……。だがそこで無闇に銃を乱射しないところが逆に厄介だ。

銃を使うのは初めてらしいが人を殺すのは初めてではないのだろう。奴の様子を間近で見てもまるで落ち着いていた。これから初めて人を殺そうという人間が見せる反応ではない。

……どうやら撒いたらしいな。というより最初から追う気はなかったらしい。

銃を持っている人間というのはただそれだけで驚異的だ。救いは奴が銃の扱いにあまり手馴れていなかったことだろう。少なくとも至近距離で撃たれない限りまず当たらないだろうしそもそも奴が撃とうとはしまい。故に……距離を保ち続ければ私にも勝機は……ある！

私にとって幸運で貴様にとっての不運はここが建設中のビルであり、尚且つ貴様はこの場所が初めてであろうが私にとってはよく知った場所であるということだ。この地の利は、大きい。

「隠れてても無駄だぞぉ」

……まだだ。これはタイミングが重要。ほんの一瞬でも遅れたら終わり、とは言わない。一つしか策を用意しておかないのは愚か者のやることだ。これが失敗した所でまだ手はある。ある、が、それでもここで失敗すれば危険がぐつと高まることは間違いない。だから……出来ればここで仕留めておきたい。

「どこだあ？」

……あと少しだ。あと少し進め。

……貴様に教えてやろう。本気で生きようとする者の力を。

よし……！ 今だ！

私が力を加えたことでただでさえ不安定であった目の前の物体が重力に従い、落ちていく。

狙いはもちろん……奴だ。

ゴーン！

砂煙のせいでよく見えないが……念のため次の策に向けて動くか
……いや、その必要は無い……か。

「……お……おお！？ 何だこいつぁ。い……ってえな畜生が」

……ふむ。頭部への直撃は避けられたらしいな。だが、私が落と
した鉄骨に両足を挟まれ、さらに銃も手放してしまった以上、貴様
はもはや終わりだ。

「……？ 何だ何だぁ？ お前の仕業かこりゃ」

答える必要は無いだろう。さて、銃は……ああ、あんな所に。

「殺すか？ そいつで俺を」

余裕を見せても無駄だ。貴様が他に武器を持っていないのは確認
済みだ。私が手を下さずとも放って置けばいずれ死ぬだろうが……
どうするか。

残弾数を確認する。……ふむ。まだ一発も使われていないな。だ
がこの先何があるか分からない。温存しておいたほうが……。

だが、後々の禍根を断つためにも生かしておくわけにはいかない。

……あまり気は進まないが直接手を下してでも始末しておくべきだ
……。

ん？ 人の声……？ まずい……っ！

「……おい、そこに誰がいるのか？」

くそ……やむをえん。こんな状況見られれば厄介極まりない。逃
げるしかない……か。

……なぜこんなことになってしまったのだろう。

考えるまでもない。アレが原因だろう。アレ以来『世界』では何
が起こってもおかしく無い状況となっていました。

アレがなんだったのか、全く見当もつかない。知能無き知識が無
駄であるのと同じように知識無き知能もまた無力。

知るべきだ。あの時何が起こったのかを。

仁（前書き）

『最強』となった男の話。

仁

「知ってるか？ 『最強』と『必勝』は違っんだぜ」

ああ、認めよう。確かに俺はあの時までその二つを混同していたかもしれない。だが大抵の場合強ければ、相手より上ならば勝つだろう？ そいつは間違いの無い事実だ。それは俺が一番よく知っている。

だが、その例外を身をもってあいつによつて教えられた。

今は……何時だ？ 今の季節は？ 何月だ？ ここは何処で、こいつらは何で俺に突っかかってきたんだ？

いくら自問自答しようとしても分からねえものは分からねえ。まあ、最近じゃなんかおかしいことがあれば全部アレが原因だと思つておけば間違いないみたいだけだな。

目の前に倒れているやつらを起こして理由を吐かせようとも思つたが……別に良いか。面倒くせえ。

やれやれ……何なんだ？ これ。

こいつら何でこんなに弱いんだ？ それとも……俺が強いつてか？ 元々弱いのが嫌で鍛えちゃいたが、それでもどうにもならないことは山ほどあった。それが……今じゃあ……どいつもこいつも俺よりも弱く見えてしょうがない。で、実際やりあつてもこれだ。やつぱり何か変わったみたいだな俺は。

小さい頃から弱いのが嫌だった。誰かと争つても弱ければ負けて、負ければ失う。こつちが正しかろうが間違つてようが関係ない。強い方が、偉い方の主張が通る。弱い奴が貰うのは同情心くらい。こんなふざけたことがあるか！ 俺は強くなる、腕っ節だけじゃない、

どんな勝負であろうが自分の主張を通せる位に強くなる、とそう誓った。その時の俺はまだ純粹だったから神への誓いをな。

そして、今。納得いかないことは多いが、どうやら俺は目指してたものになった……のか？

「元氣ないな。どうした？」

不意に後ろから声が聞こえた。

「あ？」

「おいおい、いきなり喧嘩腰でくるなよ。話しにきただけだって」
何だこいつ。馴れ馴れしく話しかけてきやがって。こういう奴に
るくな奴はいなかった。特にアレ以降は。

「とりあえず……自己紹介でもしたほうが良いか？」

うつせえ奴だな。黙れよ。

「ん？ おい、ちよつと待てって。話をしにき……っ」

とりあえず黙らせるために腹を殴った。うつせんだよさつきから
よ。

「何が話だよ。ふざけんなよ。味方面して近づいてくる奴が一番信用
ならねんだよ」

「……つてえな。いくらなんでもめちゃくちやすぎんだろ」

うつせえよ。黙れよ。そのうるせえ男の顎を砕くつもりで廻し蹴
りを放つ。

「ちよ、あぶ……っ」

バガツ という音と共に男は倒れ……かけたが……倒れない……？
「痛つてえな……。分かったよ。お前が大人しくなるまで付き合っ
てやる」

あ？ 何が付き合うだ。ふざけやがって。てめえなんか一発だろ。

「悪いけどここからは俺も本気だ。そう簡単にやあ受けねえよ」

「とか言つといて……逃げてんじゃねえ！」

「お前みたいなのと正面からやりあえるか！」

あの野郎。絶対ぶっ飛ばす！ なめやがって。足の速さでもお前
なんかに負けるわけ無いだろうがよお！

あいつはこの建物に逃げ込んだか……。何だここ……。学校？ 何でこんな所に……。そう不審に思っているとスピーカーから声が聞こえてきた。

「知ってるか？ 『最強』と『必勝』は違うんだぜ」

ああ？ 何をわけの分からねえこと言ってるんだ。あの野郎……。放送室か……。今すぐ行ってぶちのめしてやらあ！

「お前は『最強』になって自分が何でもできるような気になってるかもしれないが、意外と穴も多いんだなこれが」

あいつのうざってえ声がスピーカーを通じて聞こえてくる。一瞬スピーカーを壊したくなる衝動に駆られたがそれよりは放送室に行つてあいつをぶちのめしたほうが早い。

待つてろよあ……！

放送室に急ぐ。……。何だ？ 何か違和感が……。走っている間も耳障りな放送は続く。違和感の原因を考えようとした矢先にあいつは俺の心を見透かすように言った。

「どうした？ あんまりにもスピードが出ねえもんでイライラしてきたか？ まあそりやそうだ。さっき俺を追いかけた時と今は違うま、それもお前の考え方次第ではあるけどな。何でか分かるか？

お前は今多分素の実力しか出せてないはずだ」

何だと……。？ 何を言ってるんだこいつ。こいつとはさっき会ったばかりだろ？ 俺に分からねえことがこいつには分かるってか……。？ んなわけあるか！

イライラして足を速めようとしても遅く感じる……。

どうなってるんだ？ まさか……。あの野郎がなんかしやがったのか！？

「……さっき言っただろ？ お前とまともにやりあって俺が勝てるわけないってさ。こうなることはわかってんだし、あらかじめ色々と調べておくぐらいはするって。だからお前が気づいてないことを結構知ってたりするんだよ俺はよ。まあつっても推測だらけだからちよつと心配だったけどな」

何だってるんだ……。？ 俺が一体何だってるんだよ！

「お前の事を調べていくうちにお前が『強さ』にこだわってたのが分かったからな。そこを突き詰めていくうちにある程度お前の持つてるもんが分かってきたよ」

俺にだってよく分かってないことがこいつには分かるってか？
「っ！か何だよ調べてたつてよ。今日会ったのは偶然じゃないってことか？」

「そもそも『強さ』って何だろうな？ ゲームみたいにパラメータが設定されてたら分かりやすいんだけどな。残念ながらそんなもんは無いし、実際に形にされないといけないもんだよな。……つまり、自分の『強さ』を比べる相手だよ。誰かと競って、比較して、相手より上に立つことで初めて自分の『強さ』つてもんが浮き出してくる。だろ？ 理由が分かったかい？ 今お前が全然力を出せていない理由ってやつがさ」

こいつ……！ そういうことが……。今はお前を追いかけているわけじゃない……。お前と勝負をしていないから力が出せない、っ！
ことかよ。しかし……。だとすると俺は……。

「俺はお前と勝負する気は無いぜ。少なくともお前の土俵になんか怖くて立てねえよ。それと……一応言っておくけど、俺はお前をどうこうする気は無いからな。お前が話を聞いてさえくれれば俺も何もしやしねえよ」

……見えてきた。あれが放送室だ。待ってるよ。お前が何を知ってるのか全部吐き出させてからぶちのめしてやる。

「お前だつて知りたいだろ？ 何でこんなことになってるのか。俺もだよ。俺たちは本来別に敵対するような理由はないだろ？ それに……敢えて言っておくけど……お前は俺には絶対に勝てない。誓ってもいいぜ」

ふ……ざっけんなっ！

放送室の中は暗幕がかかっていて見えず、扉には当然ながら鍵がかかっている。考えるまでも無い、俺は窓を壊そうと周りを見回したが……辺りには何も見当たらない。

くそっ！ あの野郎ここに来ることも全部計算済みかつ！ あらかじめ全部準備しておいたのだろっ。

普段なら素手でも壊すところだがさっきのあいつの言葉が気になってそれは躊躇われた。

何か無いかと辺りを探している間も耳障りな声が降ってくる。

「どれだけ強くつてもその強さを発揮出来ないなら意味無いよな分かるだろ？ お前の強さが発揮されるのは勝負においてのみだ。

勝負においてのみならお前は単純な力比べだろうが、知恵比べだろうがもつと言えは運が絡むような勝負でも相手を超える。その場で『最強』になる。しかし、種が分かればこんなもんだ」

黙れ……黙れえっ！ お前が俺の強さを語るんじゃないよ。

これ以上探したって無駄だろう。こいつがすぐ見つかるような場所に置いておくはずが無い。

上着を脱いで腕に巻きつける。これで怪我はしないはずだ。それでもさっきの言葉が耳に付いて一瞬躊躇したが、思い直し、振りかぶった腕を放送室の窓に叩きつけた。

思っていたほど大きな音はせず精々バキッという程度だった。少々意外だったが今はそんなことも関係ない。暗幕を押しつけあいつの姿を探す……が。

「いない……？」

声は未だに聞こえてくるがその姿はどこにも見えない。つまり……

「あ、の野郎……」

俺がさっきまで聞いてたのはあらかじめ録音されてた声だったか？ どこまでも……どこまでも俺を馬鹿にしやがって！

「時間稼ぎだよ。決まってるだろ？ 何度も言ってるじゃねえか。お前とまともにやりあう気は無いって」

上と後ろから同時に同じ声が聞こえた。ただし内容は別々で、さらに一つは単なる録音した声だが……もう一つは……！

「この野郎……！ よくも顔を出せたもんだなあ！」

「まあな。俺は相手と顔を合わせて話す方が好きなんだ」

それ以上喋らせねえよ……っ！

一步でその男の目の前まで踏み込み、拳を叩き込む。

手ごたえはあった……。全力だ。しかしまた妙な違和感を感じた。
「……痛つてえな」。どんだけ殴られれば良いんだよ俺はよ。話しに来ただけって言つてんだろうがよ」

「……何でお前平気な顔してんだよ。今度は何しやがった」

「平気なわけあるか。これは腫れるな……。全くよ……。さっき言つたろ？ お前は俺に勝てない。自分だけが特別だと思っくんじゃねえよ」

何……？ まさか……。こいつ……。

「何で俺が出てきたと思つてるんだ？ さっきまで逃げ回つたのにな。大丈夫だつて自信があるからに決まつてるだろ？」

「このっ……。！」

俺が放つた蹴りは当たることは無く、逆にカウンター気味のパンチを受けた。本来ならば考えられないことだ。

「っ……。てえ。お前……。お前一体誰なんだ」

「ふう……。何だ？ やつと自己紹介させてもらえるのか？ ようやくだな本当」

「早く言え！」

「……亮だ。それでも政府の人間だよ。一応な。つっても正規のもんじゃないしおまけに下っ端もいいところだけだな」

「政府……。？ 政府が俺に一体何の用なんだよ」

この時も俺にはそいつをどうにかしようという気が失せていた。理由は分からないが確かにこれ以上やつても勝てる見込みは薄そうだ……。今はな。

「何の用かは無いだろ。政府がどれだけお前みたいなやつ情報を欲しがつてると思つてんだよ。別に体いじくられるとかつてわけじゃないんだからよ。ただ話を聞かせて欲しいだけなんだよ。成り行きでこんなことになつちまつてるけど俺は本来お前にお願ひに来て

るんだよ。な、頼むよ」

何だよこいつ……。わけ分かんねえ。

「……それで？ その代わりお前等は俺に何をくれるんだ？」

「まあ、それなりの礼はあるだろうよ。でも何だよ。何か欲しいものでもあるのか？」

「俺はなあ……国だとか組織だとかそういうのが大っ嫌いなんだよ！ お前みたいなたつ端が頭下げたくらいでどんだけの価値があるって言うんだ？ ああ？ 頼むつもりならもっと偉い奴連れて来い！」

「……分かったよ。うちのトップに会わせる。何か言いたいことがあればそのときに言えばいいさ」

こう言えば退くかと思っただら……本気か？

「じゃあ付いてきてくれ。案内するからさ」

「呼べ」

「はあ？」

「ここに呼べってんだよ。何で俺がわざわざ行ってやらねえといけねえんだよ。ふざけんじゃねえぞ」

「……」

おら、分かったらとつと消えろ。お前の顔なんざもう見たくねえんだよ。そんなことも出来ねえくせに頼むとか都合の良いこと言ってんじゃねえ。

「悪いけどな……そりゃあ多分無理だわ」

「だろつよ。だったらとつと……！」

「だってよお前その間待つてられないだろ？」

「……はあ？」

今度は俺が疑問の声をあげる番だった。

「一旦俺がここを出たら次ここに来れるのはいつか分からねえ。時間の概念が曖昧になってること知らないわけじゃないだろ？」

時間……。確かにどの時計をみても明らかに合ってなかったり、夕方の次に昼が来たり最近では本当に今が何時か分からなくなるが…

…そういうことなのか？

「うちのトップは権力を笠に着るような人じゃないからよ。喜んでくるだろうけど……仮にも一番偉くて一番働いているような人を長く離れさせるわけにはいかねえよ」

「チツ……分かったよ。俺が行ってやるよ。ただし！ そいつには俺の前で頭を下げてもらうぞ。さらに俺が嫌だと思ったらすぐにでも止める。そいつがいかに偉かるうが俺に命令することは許さねえ」
「分かってるって。そんなに心配しなくてもお前の思ってるような人じゃないさ」

結局俺はそいつに付いていくことになったが……気にいらねえな。最初から全部こいつの思い通りだった気がする。

「おい」

「ん？ どうした」

「お前は何なんだ」

「？ 何がだ」

「お前は何を持ってんのか聞いてんだよ！」

さっきこいつ自身も言っていたようにこいつも俺と同じように何かあるはずだ。そうじゃなきゃ俺がこんな奴に……。

「ああ……さっきのか？ うゝんまあ何かはあるだろうけどなあ……。正直俺もまだよく分かってねえんだよ。さっきのはブラフってやつだ」

どういうことだ？ じゃあさっきのあれは……。

「そっぴや名前も聞いてなかったな。呼び方にも困るしもし良かったら教えてくれよ」

「……仁。寺門仁だ」

「へえ。良い名前だな。まあこんな混沌とした世界じゃ名前くらいはつきりしてないとな」

変な奴だ。こいつを見てるとイライラする。何なんだこいつ。ヘラヘラしやがって。

体感時間にして……どうだろう到着してみると意外と大した時間ではなかったように思えるが……そう何日も経ってはいない……はずだ。

「やつと着いたな。本当毎回毎回移動時間がちぐはぐで混乱してくるぜ。じゃあ行くか」

ふん……。いかにもって場所だな。胸糞悪くなってくる。

しかし……。外観はともかく中は意外とそうでもないな。受付とかも無いし……。あまり堅苦しい雰囲気が無い。それに……。人の姿が全然見当たらない……。どうなってんだ？

「おい……。本当にここにいるんだろ？ うな。嘘だったら承知しねえぞ」

「そんな意味の無い嘘吐くかよ。まあ確かに役所だとかそういうのとはちよつと違うけどな。第一今はまだ俺と仁を含めても片手で足りるくらいの人数しかないしな」

「はあ？ どういうことだよ！」

「政府も人手が足りないってことだろうよ。まあ局長自身が断つてるつてのもあるけどな。だからここに居るのは皆俺たちと同じような人間だよ。局長も含めてな」

ここに来るまでに色々話を聞いちゃいたが……。実際に来てみると驚くもんだな。

「さ、て。ここだここだ」

コンコンコン

「どうぞ」

「失礼します」

こいつも一応上司には気を付けているのかノックして相手の返事を待ってから入っていった。俺も後が続く。しかし……。今の声は……。

やけに声が女っぽいなと思ったのだが……。それも当然、椅子に座

って俺たちを待っていたのは若い女だった。

「やあ、お帰り。そちらは……」

「ええ、何とか連れてこられました」

「おい。忘れてないだろうな」

確認のために俺を連れてきた男に声をかける。このままなあなあにはさせねえぞ。

「分かってるよ。局長。あなたの方から説明してもらえますか」

「もちろんだ。さて……よくここまで来てくれた。ありがとう。まず言っておくが私は君をどうこうする気は無い。君が帰りたいと願うなら今すぐその扉を開け帰ってもらって構わないし、交換条件として欲しい物があるならば私に出来る範囲で用意させてもらう。ただ、もし君が構わないのであればその力を私に貸していただきたい」

その人の口調は俺が大嫌いな人間と大して変わらないようなものであるにも拘らず……俺は何故か不快には思わなかった。だが、それとこれとは別だ。

「……あんたの出方次第だ。俺は自分が気に入らないことは絶対にやらねえ。力で俺を従わせようとするならやってみろ。今の俺には誰が出てこようがどうとでも出来るだけの力があるんだ」

「うむ。それはたしかにすごい力だ。だが……本当にそうかい？ 誰が出てきても？」

その人の傍らに立つ男のことを言っているのは明白だった。

「何だと！？ だったら今ここで証明してやるのか！？」

前とは状況が違う。今ならやられやしねえ。あいつが何を持ってるかには知らねえが、あの時あいつ自身が何度も言っていたようにまともにやりあえば俺が勝つんだ。

「いや失礼。君の力を否定する気は無い。君は確かに強い。上辺だけの強さだとか偽者の強さだとか言うつもりも無い。確かに君は本物の『最強』だよ。今君に襲われたら私もこの亮君もひとたまりもあるまい。しかし……君はそれをしない。絶対にね」

何だ……この自信……。確かに本気でやるつもりは無かったがこ

の人とはまだ会ったばかり、俺が本当にやる奴だってことを考えなかったのか？ あの男がこの人に何かを話した様子も無い……。そう言えばこの人も何かを持ってるって話だった……。それか？

「話を戻そうか。そう言えば私はまだ自分の名前も言っていないかったね。これは失礼。私は茨木涯。この設立されたばかりの機関の局長を勤めている。その立場として今一度君にお願いしたい。どうか私に力を貸して欲しい」

俺が言うまでも無く……。その人は俺に頭を下げてきた……。何故だろう。この人の頼みを断れる気がしない。駄目だ……。だからこそ今明らかにしておかねえと。

「あんたは……。何を持ってるんだ？ それを教えてもらおう。表向きは頭を下げているようでも実際は俺が違和感無く承知してしまうようなことをしてんじゃねえだろうな」

俺としては当然即座に否定されるものだと思っていたが……。その人は困ったような顔をしながら頷いた。

「うん……。困ったことにね。その通りなんだよ。もちろん私が意識的にやっているわけではないんだが……。こればかりはどうしようもないんだ。だからこそお堅い政府の人間を説得してこんな機関を創ってしまうことも容易かったんだが……。こういう弊害もあるわけなんだな」

「何で……」

「うん？」

「何でそんなことをわざわざ俺に言うんだ？ 黙っていれば分からないことだろう」

「……。まあ遅かれ早かれどうせ分かってしまうことだしね。私なりの誠意だと受け取ってもらえると嬉しいな」

確かに……。満更でもない気分になってきている。これが全部この人の力だっというのか？ だったら……。従うべきじゃない。それは俺の意志じゃない……。相手に無理やり従わされてるも同然だ。

「俺は……。自分で考えたいんだ！ あんたに……。惑わされずに！」

「ああ、分かる。それは本当に申し訳ないことだと思っている……。だが、私としても力で無理やり人を従わせたりするのは好きじゃない。その人の意志で、私を認めてもらいたい。その上で力を貸して欲しいと思っている」

どうするべきだ……。？ 俺は……。正直心は完全に協力する方向に動いている……。しかし……。それも俺の意志じゃないんだろう？
「局長」

「うん？ どうした亮君」

「提案があります」

「仁も聞いてくれ。局長の力にも効果範囲がある。今の話を聞いた上でここから離れてそれでしばらく考えて、それで結論を出してくれ。もちろんこっちとしてはお前から話を聞かせてもらっただけでも十分助かるし、それ以上に協力してくれるっていうんならもっと助かる。でも、決めるのはお前だ。俺たちに強要させようとする気は無い」

なるほどな。随分と気を使われたもんだ。でも、そんな話聞かねえよ。俺はお前が嫌いだからな。だから……。お前に逆らって今ここで結論を出す。

「んなもんいらねえよ。もう決めた」

「えっ……。ま、待ってくれ、もう少しよく考えた上で……」

その人の、『局長』の焦った声を遮って俺は答える。

「俺を……。寺門仁をここに置いて下さい。あなたに……。局長に従います」

この人になら……。もちろん理不尽な命令なんぞ聞くつもりはないが……。それでも……。この人の願いなら聞いてやりたい。それは俺の意志だ。俺は強い。意志だって例外じゃない。俺の意志は絶対に曲げねえ。意地なんかで曲げたりしない。

そうだ。力も意志も全て含めて俺は『最強』だ。

仁（後書き）

駄文失礼しました。

茜（前書き）

機関として最初の大事件。

周りについていけず困惑する少女の話。

茜

機関のために建てられたビル、その最上階、最奥の部屋——局長涯さんの部屋に私は来ていた。

部屋の中には私を含めて既に4人が集まっている。集まったメンバーを見るに後残っているのは彼だけだろう。

ここにいる私以外の3人で私とかううじて仲が良いと言えるのは、立派な椅子に座っているこのトップ、涯さんだけ。その他の二人とは会話すらろくにしたこともない。他の面々にとつてもそれは似たようなものであるらしく、会話しきものは無く重苦しい雰囲気

が部屋に漂っていた。

そろそろ限界だと思ってきた時……。

コンコンコン

ノックの音がした。彼だ。

「入ってくれ」

涯さんが答え、彼——亮は中に入ってきた。

「失礼します。 おお…… 皆さん既にお集まりで。 ちょっと待たせちゃったかな」

相変わらず軽い。だが、それが彼の持ち味であると同時に彼はそれだけではないことをここにいる者は皆知っている。

「さて、これでようやく揃ったな。 各々それなりに見知った仲ではあるだろうが改めて私の方から紹介させてもらおう」

亮が近くまで来たのを見届けてから涯さんが口を開いた。

「まず、今入ってきた少年が亮君。 機関の設立間もない頃から私の下でよく尽力してくれた、頼りになる少年だ。 最初に会ったのは彼だというものも少なくないだろう」

確かに私も機関の中で最初に会ったのは彼だ。ここにきてから分かったことだが、当時の彼は（ひょっとしたら今も？）涯さんの頼

みで異変の影響を受けた人間を探して回っていたらしい。それならば多くの者にとって彼が最初に会った機関の人間だというのも納得だ。

「そしてもう一人の少年。こちらは寺門仁君。その『強さ』で私を随分と助けてくれた。私は立场上敵を作りやすいのだが、彼がいてくれたおかげでさしたる危険も無くここまで来れた」

寺門仁……。たまにしか会うことはないが、その時はいつも涯さんの側にいる。涯さんがいうのだから事実強いのだろう。それも単純な強さという意味ではなく……。正直彼とはほとんど話をしたこともないのでよく分からない。ただ聞こえてくる噂から随分厄介な人間だという印象を受けた。おそらく涯さんでなくては彼を大人しくさせておくことなどできないのだろう。

「で、私に近い方の女性が響さん。音無響さんだ。とても平和的な人だよ。争いを避けたい時等は彼女に頼んだ方が実に平和的に解決する。機関に来てくれた時は本当に嬉しかったものだ」

音無響……。最初に名前を聞いた時は偽名では無いかと疑ったものだ。まあまだ疑いは晴れてはいないが……。

彼女は亮や仁と違い基本的にいつも機関にいるので姿を見かけることも多い。彼女を好いている者も多いようだ。しかし……私はどうも彼女が好きになれなかった。笑顔の裏に何か隠しているようで油断がならないのだ。まあ、彼女が何かしようというのであれば私が全力で止めるつもりだが。それくらい力は私にもあるはずだ。「さて、そして最後に残ったのが彼女、白藤茜ちゃんだ。他の皆が割と偏った力なのに対して彼女は所謂万能型だな。この中ではまだ機関に来て日が浅いが、内で外でその力を存分に発揮してくれた。何かあれば彼女に頼んでおけばどうにかなるなどと思ってしまったことさえあるよ」

そして私の番だ。しかし、自分で聞いていて思ったが涯さんは少々私を高く評価しすぎている節がある。説明の中ではまるで私が他の3人よりも勝っているかのような言い方をされたが、この中で誰

が一番実力が無いかと言えばおそらく私だろう。そもそも私をこの3人と同列に並べることがもうおかしい。私に出来ることなど他の人間にでもできるような雑用程度なのだし。

しかし、それはともかく何故私達を集めたのだろう。私は除くにしてもこの3人が一堂に会することなどそうそう無いと聞いているが……。

「一通り紹介を終えたところで本題に入らせてもらうが、君達はこの機関の中でも最古参だ。大分ここでのやり方にも慣れてきただろう。残りの者達はまだ来て日が浅く、不安が残るため、君たち4人だけを集めた」

今の私達は保護の対象かつ、被験者であり、協力者、そして局員でもあるという何とも厄介な立場だ。とはいえ、ここに正規の局員は局長である涯さんのみなので何かあれば私達が動くしかない。普段は人手があまりにも足りないために単独行動がほとんどだが……二人以上、それも今回のような古参組4人全員とは異例も異例だ。一体何があったのだろうか。

「これまでは君たちにはそれぞれ別々の頼みごとを次々にしてきたために、こうして集まれる機会など無かったが、最近ようやくそれなりに落ち着いてきたのでね。この場で君たち全員に感謝の気持ちを伝えさせてもらうよ。君たち本当にこれまでよく私の我儘に付き合ってくれた。ありがとう」

「涯さん……。まさかそれを言うためだけに私達を集めたわけじゃないんでしょう？」

本題に入ると言っておきながら感謝の気持ちを言う涯さんへの疑問を口に出す。

「うん……。いや、本当にそれだけならば良かったんだけどね……。先日亮君に調べに行ってもらって判明したことだが、最近とある宗教団体が生まれたらしい」

宗教団体……。あまり良い予感はない。

「こんな世の中だからね。みんな何かに縋りたいと思っているのだ

ろう。それは決して悪いことではない。だが、その宗教団体というのが少々過激だね。教祖とされる人間は不思議な力があるらしい。十中八九異変の影響を受けた人間だろう。さらに教祖と同じく不思議な力を持つ者たちが自分は特別な人間なのだと思いこぞって入信しており、今では幹部クラスにまで上り詰めているとか」

「……しかし局長。それは確かに厄介ではありますが、だからといって今そこまで悩む必要はないでしょう。こっちの体制が整ってからゆっくり話でも聞きに行けば」

寺門仁の言葉だが……少々驚いた。噂からして粗暴な人間という印象が強かったのに……。それとも相手が局長であるからこそだろうか。

ともかく彼の言うことにも一理ある。機関がそういった人間の保護や研究を目的としているとはいえ、嫌がっている人間を無理やり連れてくることなど出来ないし、話を聞きに行くにしてもそんな危険な匂いをする教団が相手では何が起こるか分からない。今の状況で無理にどうにかする理由などないはずだ。

「私もそう思っていた。亮君から話を聞くまではね」

？　どういうことだ。教団に関して何か緊急を要する事態が起ったとでも？　答えを求めるように亮の方を見る。

「……局長に言われて簡単な調査に行っただけだな……。殺されかけたよ」

「！？　どういうこと？」

見たところ傷は無いが……見えない所にひどい傷でも負っているのだろうか……？

「影響を受けた人間が教団の上層部を占めていることからして、あいつらはそういう人間を神聖視している。ただ、それはあくまでも教団内の人間に限ってね。教団の人間でも無いのにそんな力があるのは異端ってことだろ」

「それで襲われて……？」

「いや、俺がそうだってことまでは分からなかったみたいだ。ただ、

あいつらは既にこの機関のことを知っていた。で、ここを襲う計画を立ててやがったよ。俺もこれはやばいと思って出来る限り情報を集めてから帰ろうと思ったんだけどな。いざ帰ろうって時に見つかったまっつてよ。説明する間もなく襲われて、命からがら逃げ延びたって所だ」

「どこか怪我を？」

「いや、それは大丈夫だ。銃だの爆弾まで持ち出された時は目を疑ったが、幸いかすり傷が少しついたくらいで済んだよ」

何てことだろう。信じられない。少なくとも異変が起きる前までは世界でも随一なほどに安全な国だったはずだここは。それが何故……。それだけ世界が変わったということか……？

「皆聞いている通りだ。それがいつになるかは分からないが、亮君が生きていて、我々が知ったこともおそらく分かっているだろうから、もしかしたら今日明日にでも来るかもしれない。分かるね？　これがどれだけ大変な状況か」

「……せめて死を偽装するくらいのことやとけよ。てめえのせいでただでさえ少ない時間が更に減っちゃっただろうが。何だったら偽装じゃなくて本当に死んじゃっても良かったんだけどな」

先ほどとは別人のような暴言。やはりさっきのは相手が涯さんだったからか……。しかし、この寺門仁という少年、噂の中に亮と仲が悪いというのもあったが……意外と噂の信憑性というのものもあるものだ。

「こらこら仁君。亮君がいなかったらこうして知ること出来なかったんだからそんな言い方は良くないよ」

さすがは涯さん。寺門仁を一瞬で黙らせた。まあ当然だ。明らかに亮に否は無い。むしろ良くやってくれたものだ。と私達は本来褒め称えるべきだろう。

「で、だ。我々としても早急に手を打つべきだと考える。彼らにも彼らなりの考えはあるのだろうがそれを素直に聞いていたら皆殺しだ。それは絶対に避けたい」

「……あらかじめ相手の正体も場所も分かっているわけですし、警察に連絡してみても？ 私達は仮にも政府直属の一機関なんですから」

そう、困ったらとりあえず警察へ、だ。何も私達が直接どうにかしなければならぬ理由はないだろう。

「……既に連絡は取ったよ。しかし、向こうも人手不足、その上ここまで来るのにどれだけかかるか……。基本的に警察の力はあてにしない方が良さだろう」

ああ……。そうだった。警察が絶対だったのはあくまで異変が起こる前の話だ。今となつては實際来てくれたとしてもどれだけ役に立つか……。私も以前までの考えが抜けてないな……。

「……俺一人ならともかくここであなたを守りながらどうにかするのはちよつと難しいですね。お荷物は他にもたくさんいるし。別にここで待ち受ける必要もないでしょうし、政府のそれなりに戦力が整っている場所へ行きましょうよ」

自分一人ならどうにかしてしまふと言い切れるあたり自分の強さによつぽど自信があるらしい。まあ意見そのものには私も賛成だ。さつきから思っていたがこの少年は態度の割に意外と正論を吐く。頭も悪くは無いのだろう。

しかし……。涯さんは首を横に振る。

「いや……。私は逃げるつもりはない。彼らの主張をすべて受け止め、その上でこちらの主張を通す。私は国を良くしようとは思うが、国の狗に成り下がるつもりは無い。この件は国とは関係ない、我々だけの力でどうにかするべきだ」

「……局長がそう言うのでしたら」

寺門仁はあつさりと引き下がるようだが、私は納得いかない。

「それで機関の人間に被害が出るとしてでもですか？ 今回のことは私達だけでどうにかできる問題じゃありません。変なプライドは捨てて助けを求めるべきです！」

少々語気が荒くなつたが、涯さんは怒るでもなくあくまで冷静に

返す。

「逃げている最中に待ち伏せだの後ろから攻撃を受けるだのしたら防ぎようがないだろう。準備もしっかりできて地の利もあるここにいるのが一番だ。何も感情だけで言っているわけじゃない。それに相手がいきなり襲ってくるというわけでもあるまい」

「は、話を聞いていなかったんですか？ そいつらは私達を殺しにここに来るんですよ！？」

「話は聞いていた。しつかりとね。だからこそ彼らとしても神聖視している人間を教団の人間じゃないからと言っていきなり襲ったりはしないはずだ。何らかの条件を出すものと思われる。……例えばこの機関ごと国の手を離れ、教団に入る……とかね」

「な、何を……。亮が見つかるなり殺されかけたって言ってるでしよう！」

本当にこの人は何を考えているんだ。

「その時とは状況が違う。亮君が見つかるなり殺されかけたのは、知られてはならないことを知られてしまったことによる口封じの意味が強い。亮君がそうであることも知られていなかったようだし。彼らとしても私達が素直に従うとは思っていないだろうからね」

よく口と頭の回る人だな……。論破されてしまいそうだ。でも……だめだ。彼女の言っていることが正しいとは思えない。

「だとしても……おかしいじゃないですか。たとえすぐには攻撃してこなかったとしても、こっちがそれを受ける気がないのならいずれは戦いになる……。いえ、銃や爆弾を持っているような相手です。戦闘にすらならない。虐殺です。それでもいいんですか！？」

私自身まだこんな所で死にたくないし、死んで欲しく無い人もここには大勢いる。と、いうか全員だ。だからこそ……私もこれだけ必死になる。それなのに……この人はそのことをさつきから考えていないとは思えない。人の命がかかっているというのに。

「……茜ちゃん、君は本当に人を想える優しい子だ。それは素晴らしいことだと思う。ただ……先ほどから君は異変が起きる前までの

常識で考えてしまっている。確かに……私の考え無しだと言われたらそれは否定できないが……私としてはここにいる私を含めた5人だけでもどうにか出来ないことは無い、とそう考えている。一人の犠牲を出さずともね」

「そつ……そんな……わけ……」

「では君以外の人間にも聞いてみよう。どうだい仁君？」

「……局長が相手を今すぐ全員殺してこいと言うなら俺はそうしますし、機関を守れと言われても……難しいでしょうけどできなくはないと思います」

「ふむ、まあ殺せなどとは口が裂けても私は言わないが……響さん、どうだい？」

「……争いなど、起こらないのが一番です」

「まあもつともな話だね。では亮君、どう思う」

寺門仁も音無響さんも涯さんの言うことに反対はしないというのか？ いや、音無さんに関しては答えにすらなっていないかったように思えるけど……。

でも……彼なら……。私は最後の希望を込めて亮の方を見る。これまで意外にもほとんど口を開かなかった彼は私達を一人ずつ見回してから口を開いた。

「局長も二人もそういう意見なら俺が何か言ったところで無駄な気がしますけどね。まあ……自信なんか無いですよ。人の命がかつてんのにそんな大層なことは言えない。でも、自信の無さは逃げるにしても待ち受けるにしても同じくらいですけどね。どっちを選んだからって俺の力が劇的に上がるわけでもない」

「なるほど、君としては逃げようと待ち受けようとどちらにせよどうにか出来るだけの自信があるわけだ。つまり、どちらを選ぼうと構わない、と」

い、いくら何でも曲解しすぎだろう。どちらにしても彼自身は変わらないと言ったが、そんな大きなことはいっていない。でも亮もそれに文句を言わないということは、そういうことなのか？

何で……何で皆してそんなに余裕になれるの？　いくら常識が変わったって言っても撃たれれば死ぬし、どうにもできないことだって山ほどあるはずなのに……。

何で……？

「よし……では決を採る。ここで待ち受けることに賛成の者」

涯さんを含めて私以外の全員が手を挙げた。

「……茜ちゃん。まだ納得がいかないか。本来なら君ともよく話し合いたいのだが、残念ながら今は時間が無い。よって多数決により、結論としてはここで待ち受けることとする。さて、私は早速やらなければならぬことが山積みだ。諸君らも解散して各々動いてくれ……亮君。茜ちゃんは任せるよ」

「またそんな……はあ……分かりましたよ。茜」

「……何で……どうして……？」

「とりあえず出よう。ここじゃ満足に話もできやしない」

亮に手を引つ張られる形で部屋を出た。後ろでは涯さんが慌しく動いている姿が見えた。

「……お前の言うことも分からないじゃないけどな……。決まっちゃった以上は精一杯生き残るために全力を尽くさないとな」

「亮も……大丈夫だと思ってるの？　本当に全員無事で済むと……そう思ってるの？」

「……正直に言うとな不安はあるよ。上手くいくなんて保証はないしな。でも、俺は実際に相手を見てきて……どうにかならない相手でもないと思っただよ」

「何で？　おかしいじゃない！　そういうカルト教団の恐ろしさを知らないの？　暴走したら何をしかすか分かったものじゃない。いくらあなた達が普通とは少し違うことができるとか言っただって相手も同じなんですよ？　何でそんなに余裕でいられるの！？」

止めない……。とてもどうにかなるなんて思えない。どうして分かってくれないの……？

「俺は……調べに行つた時にできるだけの情報を集めたよ。教団の

規模から教団幹部や教祖の顔、どんな力があるか、武器は何を持ってるか。教団として何を掲げているか。等等俺が得たものは全て局長に話してある。それを分かった上であの人は大丈夫だとそういう結論を出したんだ。まあ、仁は局長に従っただけだろうし、響さんは……まあどうなってもあの人だけは問題ないだろうしな。局長も迷いはしただろうけど、最善だと思う結論を出したんだ。あの人がどれだけ機関の人間を大事に思っているか……分かるだろ？」

「……じゃあ亮は、ナイフで刺されても銃で撃たれても死なないって言うの？」

「いやいや、それはないだろ。化け物が俺は。俺だってんなことされたら普通に死ぬよ」

「そうでしょう！ 私は……私は亮にも、誰にも死んでほしくないの！ ううん、たとえ死なくなつて、どんな大怪我を負うかも分からない。涯さんや……音無さんみたいな女なんかどういう扱いを受けるか……」

亮にどれだけ言われても私は不安が拭えない。そんな……危険なこととしてほしくない。私達は警察でも……特殊部隊でも何でもないんだから……

「……そうか。まあ、そうだろうな。でもな……もうこの際だからはつきり言っておくけど、俺一人なら……どうとでもなる。俺が殺されるなんてことはまず無いと思ってくれていいぜ。それは仁や響さんも同じだ。だから、局長はまあ仁が守るだろうし、4人以外は茜、お前が守ってくれればいい。正直今回心配すべきなのはそれくらいだけだ」

「出来るわけ……そんなことできるわけ無いじゃない。私を何だと思ってるの！？」

「出来る」

「えっ……」

「出来るさ。お前自身はまだ慣れてないかもしれないけどな。お前には十分それが出来るだけの力がある」

どうしてだろう……。亮の話を聞いていると本当にそうであるように聞こえてくる。本当に大丈夫な気がしてくる。

「ほら」

亮が何かを差し出してくる。

これは……。お守り？

「大丈夫さ。お前に俺の力を少し貸すよ。お前に力を与えてくれる」
「ま、待ってよ。私まだ納得して……」

「この『世界』ではな、信じれば信じるだけ自分の力になる。はは、夢みたいだろ？ だから……。自分を信じる。一応ここでは茜の先輩に当たる俺からの助言だ」

そう言って……。亮は去っていった。何でだろう何の根拠も無い言葉だったはずなのに……。すごく安心した。

出来るのだろうか……。私に……。いや、やるしかないんだ。信じる……。自分を。

茜（後書き）

本人はまだ自覚していませんが茜もまた他の3人に負けず劣らずチートな性能です。力が最大限に発揮された場合は、ですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3272w/>

世界と神話

2011年12月19日14時45分発行